

女の視点で見る農業経営



女ひとり、給餌は3日に一度で

120頭肉牛肥育経営。

三嶋八重子さん

みしま・やえこ 昭和17年1月19日生まれ。山口県美祢郡秋芳町出身。県立美祢高校を卒業後、学校職員の勤務を経て、36年、夫善治さんと結婚。義父研治さん（故人）と共に農作業に従事し、38年5頭の肥育牛を導入したのをきっかけに徐々に規模を拡大。40年の三嶋牧場設立時から、経営の中核として活躍する。現在は、肥育牛120頭の飼育と、堆肥の販売を手掛ける。一男一女の母。山口県農家生活改善士、美祢市女性問題審議会委員、美祢市農業振興協議会委員、山口県文化振興財団評議会評議員、厚東川水系水質保全生活排水対策指導員等を務める。〒759-22 山口県美祢市伊佐原町河原688 ☎08375-2-2785

「山口に、ひとりで120頭もの牛の肥育を手掛けている女性がいる」

という、読者からの話を頼りに、山口県美祢市の三嶋牧場を訪れた。その人は、三嶋八重子さん（55歳）。「ひとりで120頭」と聞き、最初は大柄で快活な「肝っ玉母さん風」の女性をイメージしていたが、実際にお会いしてみると、予想に反して、小柄でとても物静かな方だった。

三嶋さんの牛舎は自宅から200mほど離れた小高い場所にある。敷地面積6000m²。4ブロックに仕切られたパドックの中で、120頭の肥育牛が飼育されている。舎内はいたつて静か。糞尿の臭いもなく、床に敷きつめられたおが屑の香りが漂っている。

「うちの牛は、みんなおとなしいってよく言われるんですよ」
牛たちは、牛舎に見知らぬ人間が足を踏み入れても鳴きだすこともなく、通路を歩く三嶋さんのあとを追うぐらいで、いたつて穏やか。いかに快適な環境にいるかを物語っている。

八重子さんが嫁いだ時、三嶋家には農耕用の牛が一頭きりだったという。いつたいどうやつてここまで規模を拡大してきたのだろう。

結婚4年で経営の中心に

八重子さんは、美祢市にほど近い秋芳町の出身。実家は稻作中心の農家だったが、娘時代はほとんど農作業を手伝ったことはなかった。高校卒業後地元の小学校に事務職員として勤務。その後から善治さんとのお見合いの話を持ち上がりっていた。「最初は私、行かん、行かんって言つてたんですよ。でも結局縁があつたんでしょうね。丸一年で仕事をやめて結婚しました」

36年の結婚当時、三嶋家では水稻80a、リンゴ20aを栽培する他、4haの山林を所有していた。

農作業や山仕事の主力は、専ら夫の両親である研治さん、トキ子さん夫妻。長男の善治さんは、山口県の育成牧場に勤務する公務員という、兼業農家だった。家を預かる八重子さんは、結婚と同時に農作業に出るようなる。

2年後の38年、暖地リンゴの栽培をストップ。

それまでは8月半ばのお盆に向けて出荷していたが、味が消費者の口に合わなくなつたことや、受粉や消毒のための入件費が嵩むことなどが原因だった。また、当時は耕作用の牛を1頭飼っていたが、年に一度種をつけ、子牛を市場に出して家計の足しにしていた。その産まれた子牛を市場へ連れて行くのは、八重子さんの役目だった。

「その頃はまだ、二十歳そそこの女の人が牛を連れて来るなんて珍しかつたんですね。業者の方の目に止まって、『うちの牛を飼つてみないか』って誘われたんです」

それを、家に帰つて研治さんに話したところ、「いいじやろ」ということになり、早速1頭の肥育牛を導入。当時は、まだ日本の食卓に牛肉は珍しく、肥育牛を育てれば、育てただけの収益が望めた。

さらに2年後の40年には、美祢農協から、近代化資金60万円を借り入れて牛舎を建て、規模を30頭に拡大し三嶋牧場を設立。夫には勤めがあり、その両親も病氣がち。この時から八重子さんは、名実共に牧場の代表を務めることになった。また、この時から肥育した牛は、直接市場へ出すのではなくは、（有）秋吉台肉牛ファームとの受託飼育の契約を結び、販売ルートを一本化した。

牛の頭数が増えるに連れ、糞尿処理の問題に悩まされた。

「置場がなくて困るんです。近くの農家の方に、稲刈りが終わつたら、田んぼに入れさせてくださいとお願いして、タダで運んで入れていました」

当時はまだ、八重子さんは車の免許を持つてい

なかつた。善治さんが仕事から帰つてからの夕刻

や、日曜や休日を割いて堆肥を運んでいた。そんな状態が続いて、自分の田に手が届かなくなつてしまつた。

「稻と牛を同時にやり続けるのは、とても無理だと。それで田んぼを人に預けて、肥育一本にすることにしました」

廃業か移転か？ 一つに一つ

そして42年に畜舎を増設。頭数も2倍の60頭に増やした。それまでのちょうど2倍の規模だから収益も2倍になると見込んでいた。

「そつちの方ばかりに頭がいつっていたんですね。実際始めてみたら、餌も労力も出でてくる堆肥も2倍。堆肥はもう自分の山に捨てるしかない。今考えるともつたない話ですけど、どんどん捨てるしかなかつた」

集落の中に牛舎があつたので、悪臭やハエに対する苦情が発生し、保健所から指導を受けることも少なくなかつた。その上、頭数が増えた分、牛自体に目が行き届かなくなつてしまつた。

「朝、牛舎に行つてみると、突然牛が死んでいたことがたびたびありました。これはもう、牛を止めるか、牛舎を移転するか、二つに一つしかない」と……」

同じように牛を飼つていた先輩にも、義父の研治さんにも、「止めた方がいい」と言われたといふ。それなのに、

「ここで止めたら、自分が負けたことになる。今までやつてきたことは、一体何だったのかつて」

どうしても、どこかに移転して牛を飼い続けたい。そこで、自ら方々を歩き回り、結局自家で所有の山林の中の一角に移転先を見つけた。以前は芋や雑穀を植えていた所で、当時は雑木林になつていた。そこを整地し、新たに牛舎を建てるこ

を決意したのだ。

それにしても、周囲の反対を押し切つてまで、八重子さんを移転に踏み切らせたものは、一体何だつたのだろう。

「私は結婚前に1年勤めてたでしょ。同じ年代でも、お勤めを続いている人たちは、お化粧をしてきれいな服を着て働いている。ところが、農家の女性人は、いい物を着たらいけん。着たつてどうせ汚れるんだからもつたないって言われるんです。そんな自分をものすごく惨めに思つたわけです。でも、いつも思つていました。いつか給料取りの人たちと同じになる。負けるものかつて」

そうして家族を説得し、昭和50年、傾斜地を埋め立てて新しい牛舎を完成させた。建築費は総額1000万円。取引先の有吉台肉牛ファームが銀行から資金を借入れた資金を、月額10万円、10年かけて返済する形をとつた。

規模もそれまでの60頭から、一気に120頭に拡大。悪臭やハエの問題は移転で解決できるものの、労働効率や糞尿の処理など、課題は山積していた。この頃から研治さんは、体が弱り、痴呆の症状も始めている。八重子さん一人で牛の管理が行き届くような、労働効率のよい牛舎が必要になる。何度も牛舎の設計図を書き換えた。

まず、舎内で人間の歩く通路は、牛舎全体を見渡せるよう高い位置に作ること。こうすれば、自分より背の高い牛たちの病気や故障の早期発見ができる。また、エサをやる時に、飼料袋を高い位置に持ち上げたり、いちいちシャベルで救うのは、体力や時間を消耗する。通路を高くした分、エサ台や水飲み場は低い位置に設置した。

それから特注の「飼料車」も作つた。6キロ入りの配合飼料が6袋分入る大きさ。前面が開くしくみになつていて、餌台の前で、テコの原理で持ち上げれば、少ない力で中身を全部投入できる。この車を使えば、約1時間あれば1人で4つ

のパドックにやり終えることができる。

さらに、牛舎の隣に450m²の堆肥場を設置。以前はタダで農家に配つたり、山に投棄していた糞尿から堆肥を作り、肥料として出荷することにしたのだ。牛舎の清掃の時は、牛を空いでいるパドックに移動させる。そして牛の出した糞尿を、床に敷きつめたおが屑もろともダンプシャベルでかき集め、隣接した堆肥場に積む。この作業も八重子さんは、たつた一人で1時間でやり終えてしまうという。いや厳密に言うと、「たつた一人」というのは、正確ではない。

柴犬の雑種のボスと、セントバーナードのゴンタ。この2頭の「牧牛犬」が活躍している。中型犬のボスは、もともとペットとして飼っていたもの。ゴンタは子犬の時、知人に飼っていたのが、あまりに大きく育つたために飼い主が持て余し、三鷹家に引き取られてきた犬だ。

八重子さんは、最初はこの2頭を散歩がてら牛舎に連れて行つていたのだが、いつしか掃除の前に牛を移動させる時、八重子さんと一緒に牛を追いか立ててくれるようになった。

それから赤いシャツに赤い長靴。これが八重子さんが作業する時のユニホームだ。これは「どうせ汚れるんだから、地味でいい」的な辛氣臭い因習に対する反発と、「私が経営者なんだ」という心意気の現れのようと思える。でも、相手は牛だし、赤い色を見ると、興奮するのでは？

「観察に見える方は、皆さんそうおっしゃいますけど、別に色は問題ないみたいですよ」

とこつこり。現在はホルスタインの牡、雌と、黒毛和種とホルスタインを掛け合わせたF1を肥育。餌は受託を受けている秋吉台肉牛ファームの指定した配合飼料とイタリアンライグラス。自給飼料はゼロ。すべて購入している。

新生舎ができるから、状態の悪い牛を早期発見できるようになり、突然死亡する悲劇も起こらなくなつた。善治さんが仕事から帰つてからの夕刻や、日曜や休日を割いて堆肥を運んでいた。そんな状態が続いて、自分の田に手が届かなくなつてしまつた。

地域の女性の支援を得、堆肥を出荷

さて、新牛舎完成後は、牛の肥育は順調に進んでいた一方で、新たに堆肥の販売が始まった。園芸用の肥料業者と契約を結び、指定の袋に堆肥を詰めて出荷しなければならない。最初は家族だけで対応していたが……。

「夜注文が入ると、遅くまで詰めにやなりません。父と母は体が弱っていたから、勤めから帰ってきた主人と子どもたちとみんなで、やつぱりムリが出できました」

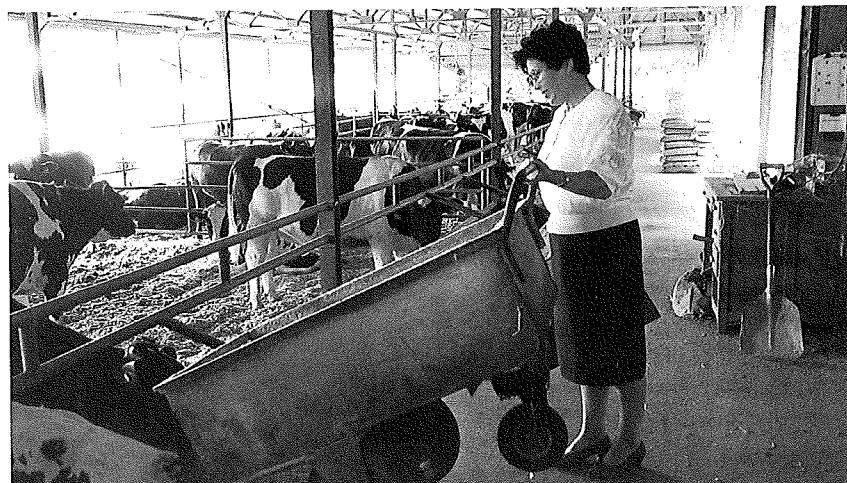
そこで八重子さんが所属する、地元の「生活改善グループ」の人たちに相談したところ、地域の女性たちに袋詰めを手伝ってもらえることになった。メンバーは、みな農家に嫁いだ女性たち。農繁期に作業を手伝う以外は手が空いているが、子どもに手がかかるたり、介護の必要な老人を抱えたりで、なかなか外へ勤めに出ることができない人たちばかりだった。

袋詰めの報酬は、40kg入りが30円。20kg入りが20円。時給で縛られることもないので、作業の途中に抜け出して、お年寄りに昼食を食べさせたり、学校の授業参観に出かけることもできる。その上自分主義の通帳に貯金もできるとあって、働く女性たちも大助かり。地域のネットワークや女性の空き時間を、うまく経営に盛り込んだというわけだ。今では堆肥の袋詰めは彼女たちに一任するまでになっている。

「でもね、一度大失敗しちゃつたんです」

牛舎から出た生の牛糞尿を、おが屑ごとタイヤシャベルで切り返し、十分に空気を入れて熟成させた三嶋さんの堆肥は、良質の有機肥料として業者からも消費者からも評判が高かつた。注文数は増える一方。けれど、牛の頭数が変わらないのだから出てくる糞尿の量は変わらない。

「牛もたまには言いますよ。モー（結構）一つて」



餌やりは3日に1度。給餌を楽にするための台車と通路を高くしたのも三嶋さんの工夫

と急かすものだから、完全に醸酵していないものを出したんです。すると、作物を植えてから二次醸酵して被害が出てしまったんですね。今度はグ

ーンと売れ行きが落ちてしまいました」

今度は堆肥は溜まる一方。業者からの注文も減ってしまった。そこで、八重子さんは一計を案じた。堆肥といえば、袋の色は大方「緑」と決まっていたところへ、今度はしっかり醸酵させた堆肥を、「ピンク」の袋に詰め、業者を介さず、三嶋牧場の名前で直接売り出したのである。するとだんだん立ち直りを見せ、売上が落ち込んでいた業者からも、順調に注文が入るようになった。

「いくら出せと言われても、ちゃんと醸酵させたものでなければ、『出さん』ときっぱり決めないといけんなつて。いい勉強になりました」

こうして糸余曲折を経て、現在の三嶋牧場の粗収益は肉用牛が470万円、堆肥はそれを上回る480万円。所得はそれぞれ320万円、310万円で合計630万円に上っている。

エサは3日に一度で大丈夫

一家の主婦でもある兼業農家の女性が、一人で120頭の牛の肥育と、そこから出る堆肥の販売を手掛けている。そう話すと、

「まあ大変ですね。それじゃどこにも出かけられないでしよう」

と一様に返事がかえってくる。でも、三嶋さんは、三嶋牧場の代表であるだけでなく、河原生活改善実行グループ、美祢市農業振興協議会委員、美祢市女性問題審議会委員、山口県農家生活改善士……など、実際に多くの役職に付き、会合や講演に出かけている。最近では海外の研修、視察などで家を空けることも少なくない。それでも、牛たちが病気もせず順調に成長しているのは、いったいどういうわけだろう？

女の視点で見る農業経営



牛以上に収益が上がるという三嶋さんの堆肥販売

実をいうと、八重子さんは、エサは3日に一度、

掃除は5日（雨期や台風の時期は3日）に一度、

堆肥の切り返しは1週間に一度のサイクルで作業をしている。作業のない日も、牛舎へ足を運んでいるが、それは「顔を見る」程度。それでもちゃんと牛は育っていく。

「私には家にいるから、いろんな役目が来るんですね。それをどんどん受けなければならない。そ

こで毎日少しずつエサをやるものも3日に一度やるのも牛の状態は変わらないとか……いろんな記録をとつて工夫しました。元を糺せば”手抜き”から始まつたやり方かもしれないですね」

たしかに、牛舎を移転した50年以降は、子どもたちにも手が掛かり、夫の両親の介護に追われるなど、ただでさえ人生で最も多忙を極めた時期だ。現在のノウハウはそんな中で時間をやりくりしながら、獲得してきたものなのだ。

60歳定年、小規模共済で退職金

嫁いだばかりの頃は、自分は単なる農家の労働の扱い手に過ぎないのでないかと強く思っていたが、それを表に出すわけにもいかなかつた。

「だから、きっといつかは、いつかは……そんな

思いがありましたね」

そういうするうちに体の弱つた夫の両親に代わり、経営の中心に立たなければならなくなつた。やりたいからやるというよりも、やらざるを得なかつたというのが実感だという。

「このままでは何も自分に残らない。エライ（辛い）とか、きついとか言いながら、ただやるだけでは、退職金も何もない。最後に残るのは神経痛だけじゃないかって」

「もう止めたい」「どうなるんだろう」と不安に陥ることも少なくなかつたが、大英断の新牛舎の設立をきっかけに、肥育牛、堆肥共に順調に延びてきた。

「今だからやつてきたよかつたと言えます。私も思つんですね。農業はダメだ、ダメだと言う人もいるけれど、それはやり方次第。人が何かをしてくれるのを待つんじゃなく、自分で切り開いていかなければ、どうにもならないんじゃないかな」と

最初はタダで農家に配つたり、山へ廃棄するだけだった糞尿を、堆肥に変えて商品として出荷する。家族だけでは手が足りないので、地域の女性の手を借りて利益を還元する。エサやりや牛舎の掃除は毎日しなくていい。だから地域社会の会合や講演に出かけている。それが三嶋さんの編み出した経営の「やり方」だ。

しかも、それは最初から収益を上げることだけを目的に掲げ、戦略的に構築された「やり方」とはかなり異質のもののように思える。三嶋さんの

ような兼業農家の女性は、家事、育児、老人介護、

地域とのつながり……そのすべてをこなしつつ、農業の経営主体も務めなければならない。常に農作業に没頭するというわけにはいかないので、より短い労働時間で収益の上がる作業工程を考え出さなければならなかつたのだ。「必要は発明の母」と言うが、この場合は「必然は発明の母」と言うべきだろうか。

早い時期から「農家の女性も、企業や役所に勤める人と同じような待遇と評価を」という考え方、中小企業向けの共済保険にも加入した。60歳時には「定年」を迎える退職金を受け取る予定だ。

夫の善治さんは2年前に一足先に定年を迎えている。八重子さんが出かける時は、作業を代わってもらえるようになつた。その八重子さんにも5年後に定年がやってくる。

「まあ、体がどうなつているか分かりませんからなんともいえませんけど、頭数を減らして続けられるようなら、やります」

最初は単なる「労力の扱い手」に過ぎなかつたはずの彼女が、今では当初本人の目標だつた「会社勤めの女性」はおろか、相当数の専業農家さえ追い抜く年収630万円の押しも押されぬ経営者に成長した。

事によると彼女の「エサは3日に一度」というやり方は、「手をかける」ことには熱心でも「手を抜く」ことに罪悪感を感じてしまう経営者には及びもつかない発想なのかもしれない。また軽はずみにそのスタイルだけを真似しても、牛が病気になれないとも限らない。

「農業は時間もやり方も工夫次第でなんとでもできる自由さがありますから」

三嶋さんは、その自由さをフルに生かし、最小限の労働時間で順調に牛を育て上げ、着実に収益を上げることができる、ギリギリのラインを「自分で」見出したのだ。その「やり方」にこそ、学ぶところは大きいのではないだろうか。